2026.11.08

発表者：長谷川 裕
2026.5 月入会

境界と暗号

― Bedřich Smetana, Miles Davis, Brian Eno ―

■ベドルジハ・スメタナ作曲

交響詩『我が祖国』より第二曲ヴルタヴァ「モルダウ」

第一曲ヴィシェフラド「高い城」

＜風景の移り変わりの中での境界＞

第三曲「シャルーカ」

第四曲「ボヘミアの森と草原から」

第五曲「ターボル」

第六曲「ブラニーク」

■パレ・マイケル・ボルグ作曲

『*A u r a*』より *Intro , White , Yellow , Orange* ・・*Trumpet Miles Davis*

＜色の移り変わりの中での境界＞

■ブライアン・イーノ作曲

『*M u s i c f o r A i r p o r t s*』より 1/1

＜空間に漂う空気感の移り変わりの中での境界＞

そしてこれらの楽譜に仕込まれた暗号や、イーノの書いた図形楽譜などを手掛かりにしながら、風景・色・空間という三つの世界を皆さんと一緒に聴いてみたいと思います。

『*A u r a*』では、ピアニカを加えた私なりの《*Aura*》もご紹介します。

Symphonic Poem

交響詩『わが祖国』より第２曲「ブルタバ（モルダウ）」

シーン①
二つの水源が合流する

①フルートが第一の源流を、続いてクラリネットがもう一つの源流を描き、二つの流れが合わさって次第に大きな川になっていきます。水飛沫が跳ねる音を弦楽器のピチカートで表現しています。

シーン②※
川の主題

②ここのメロディーはホ短調で書かれています。この調は、「歌いやすい」、「*Vn* の響きがいい」など諸説ありますが、私には、ホ短調は、どこか郷愁を感じさせてくれる調です。（新世界もそうです）

シーン③
森の狩り

③森を静かに流れる中、狩を表す角笛（ホルン）が響き、狩りのシーンが描かれています。狩の響きに意識が向きますが、弦楽合奏での川の流れも合わせて聴いてください。

シーン④
村の婚礼

④ボヘミヤ地方のポルカの音楽が、川からの視点で描かれています。ポルカは本来ズン・チャッ、ズン・チャッというリズムですが、川から離れた位置で踊っているようで、チャッ・チャッという遠くから聞こえるようなリズムで書かれています。

シーン⑤
月夜と水の精

⑤夜になり、昼間の賑わいは消え、川は静けさを取り戻します。月の光が水面に細く揺れています。やがて、その光の中から、水の精（ルサルカ）達が水面を滑るように舞いますが、川はただ静かに流れています。現実と幻想の世界の境界です。

シーン⑥※
川の主題の回帰

⑥モルダウの主題が戻り、次の急流へ向かいます。

シーン⑦
聖ヨハネの急流

⑦やがて遠くから、低い轟が聞こえてきます。聖ヨハネの急流を全管弦楽で描きます。川の守護を願って聖ヨハネのまつわる像があったらしいのですが、現在はダムにより水没！。残念 😢

シーン⑧
プラハへ向かう広い川

⑧ここでモルダウは、ホ短調からホ長調へ――ひとつの大きな『境界』を越えます。急流を抜け、視界が一気に開けるように、川の主題も明るく堂々と姿を変えます。

シーン⑨
ヴィシェフラド城

⑨プラハ市内に入り、彼方に、古い城『ヴィシェフラド』を望みます。

※この城は『わが祖国』の第一曲のタイトルにもなっていて、ハープで奏される最初のモチーフにはスメタナのイニシャルが暗号のように仕込まれています。

※はじめに楽器を使って解説します。

シーン⑩※
川は遠くへ ～ 終結

⑩川面からの視点が徐々に高くなっていくように、私には感じられます。そして最後は、遠ざかっていくモルダウを見送るように・・そして、この Symphonic Poem と現実との境界とは？

※印は、私が付け加えたシーンです。

本日の内容は、《Aura》から私が受け取った印象をもとにした
個人的解釈です。作曲者や Miles Davis の意図を示すものではありません。
演奏中に加える短いピアニカのフレーズも、この作品への敬意を込めた、
一人の聴き手としての『返歌』としてお聴き頂ければ幸いです。

A U R A

作曲：Palle Mikkelborg
演奏：*Miles Davis And Danish Radio Big Band*

■ ***Intro***
(4:27) この作品の冒頭で、エレクトリック・ギターが
"M.I.L.E.S D.A.V.I.S" という名前を※音列として奏でます。
※音列は暗号化されており、その成り立ちを、楽器を使って説明します。

□ 第一章『White ー誕生前』色になる前の光（無）
(6:15)

■ 第二章『Yellow ー最初の呼吸』オーボエが命の誕生を告げる
(6:57)

■ 第三章『Orange ー好奇心』歩き始めて、世界に触れる
(8:37) ※時間の関係上、第三章冒頭までとします。

■ 第四章『Red ー情熱』青年になり恋をし、怒り、挑戦、傷つくことも
(6:13)

■ 第五章『Green ー成熟』家庭、仕事、仲間との調和
(8:21)

■ 第六章『Blue ー孤独』人生を振り返る時間が増える「自分は何者？」
(6:38)

■ 第七章『Electric Red ー最後の炎』年を重ねても魂は燃やし・・
(4:19)

■ 第八章『Indigo ー超越』人生の勝ち負けを超えた深い祈り
(5:59)

■ 第九章『Violet ー帰還』命の終焉ではなく、White（無）に戻る
(9:02)

※左のグラデーションは、作曲者が各章に付けた九つの色を、私なりに解釈し、
「無から誕生、そして帰還」という一つの連続した物語として、
色の名前が付かない境界をグラデーション化、視覚化してみました。
色の名前に添えた日本語の部分も、私自身が付したものです。

A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z
C C# D D# E F F# G G# A A# B C C# D D# E F F# G G# A A# B C C#
ド ド# レ レ# ミ ファ ファ# ソ ソ# ラ ラ# シ ド ド# レ レ# ミ ファ ファ# ソ ソ# ラ ラ# シ ド ド#

Music for Airports《1/1》

作曲：Brian Eno / Rhett Davies / Robert Wyatt
Piano：Robert Wyatt
Synthesiser・Tape Loops ほか：Brian Eno

「何だ、このいい感じの音楽は？」

実家の近所の蕎麦屋で流れていた BGM が、私の Brian Eno との最初の出会いでした。

Brian Eno の作品を、私はこう聴いています。

・メロディーを追いかけなくてもいい。
・始まりや終わりを意識しなくてもいい。
・音楽を「聴く」というより、その音の中にいる。

今日聴いて頂く曲のご紹介と接し方

・Title：《Music for Airports》より 1 / 1
・Image：空港の待合室での期待感や不安感などが入り混じる空気感を音に置き換え。
・Airport を意識せず音楽に身を委ねて、しばし、瞑想のひと時を。

《Music for Airports》の制作方法

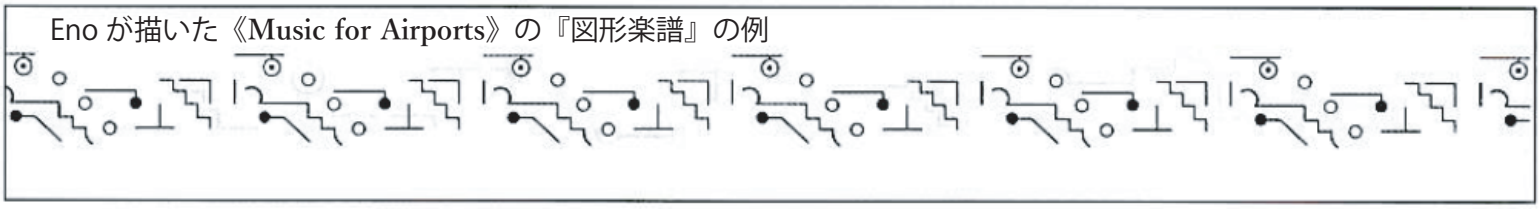
短い音の素材をテープ・ループで反復し、
異なる長さのループを重ねて構成。

同じ図形 (音楽モティーフ) がほぼ等間隔で繰り返し現れます。
10 以上の異なるテープ・ループ（音のかたち）が、
それぞれにエンドレス再生され、少しずつズレていきます。



1/1

Eno が描いた《Music for Airports》の『図形楽譜』の例



図形楽譜から拾い出した「音の記号 (暗号？)」



1 2 3 4 5 6 7 8 9 10